

ウェストン碑

英国教会の宣教師であり、アルピニストでもあるウォルター・ウェストン牧師（1861-1940）は、1888 年に来日し、最初は熊本と神戸で、後に横浜で働きました。ウェストンは日本で 15 年間過ごし、日本の風景、伝統、人々、文化、そして何よりも山に強い関心を抱きました。ウェストンは「日本における登山の父」として記憶されており、河童橋から徒歩 20 分のところにある梓川の北側の岩壁に設置されたプレートに記念されています。1937 年に日本山岳会によって設置されたこのプレートは、「日本アルプス」という呼称を世界的に広めた彼の生涯と成功を称えています。

来日前、ケンブリッジ大学で教育を受けたウェストンは、スイス・アルプスを中心に登山活動を行っていました。彼はその情熱を日本アルプスに持ち込み、地元のガイドであり友人でもある猟師・登山家の上條嘉門次氏（1847-1917）とともに 4 年間にわたり日本アルプスを探検しました。ウェストンはこの地の山を愛し、それは日本では滅多に見られない「雄大さと荒々しさ」を持つと表現しました。1892 年には槍ヶ岳に登頂し、その他にも多くの山に登っています。帰国後の 1896 年には『Mountaineering and Exploring in the Japanese Alps』を出版し、日本アルプスを英語圏の人々に紹介しました。

ウェストン牧師が日本に残した最大の遺産は、経済目的や精神修養のためではなく、楽しむために登山をするという概念を日本に紹介したことです。当時としては斬新な考え方であり、彼の山への進出は時々混乱に見舞われました。ウェストンは『Mountaineering and Exploring』の中で、地元の山の住人たちの最初の反応を次のように紹介しています。「彼らは私に質問し始めた。『銀山を探しに来たのか』『いや、それなら水晶ではないか』。私は単に趣味で登っているのだと説得するのが大変だった」。

その後、ウェストンは 1906 年に日本山岳会の初代名誉会員となり、1939 年には昭和天皇から勲四等瑞宝章を受章しました。今でも上高地にはウェストンと上条嘉門次の遺志が受け継がれています。明神池の近くにある嘉門次小屋は、現在も嘉門次の 4 代目の子孫が経営しており、6 月の第 1 日曜日には「ウェストン祭」が開催されています。

ウェストン碑が埋め込まれている岩は、世界で最も若い花崗閃緑岩の例であると、最近、地質学者の関心を集めています。